

— 「デンデラ」と「霸王別姫」 —

小島正憲

1. 「デンデラ」

「昔は老人が60になると、デンデラ野に棄てられたものと謂う」(柳田国男著「遠野物語拾遺」より)。

古代には、棄老の風習が日本各地にあった。先日の拙稿で取り上げた長野県更科の「姥捨て」もその一つであるが、一般によく知られている場所は岩手県遠野市にある「デンデラ野」であるという。少し長くなるが、下記に菊池照雄氏の著「遠野物語をゆく」から、その「デンデラ野」に関する記述を紹介しておく。

遠野は北上山地の奥深い山中にぽつんと奇蹟的に平地の空間があつてできた盆地の中の町だ。遠野にはデンデラ野という老人を捨てたといわれる場所があることは、「遠野物語」「聴耳草子」で紹介されている。土淵村の高室、青笹村の字糠前と善応寺の境、上郷村の来内、小友村の長野の藤沢、同じ村の外山、綾織村の二日町、附馬牛の小倉などに現在もその名が残っている。

土淵の佐々木喜善の生家のすぐ近くのデンデラは、現在も原野、集落とはほんのひとまたぎの小川で区切られた高台にある。ここには低い土塀をまわした一屋敷分ほどの区画がある。瀬川マサエばあさんが生前に「ここは捨てられた老人たちが小屋掛けをして自分たちで食物を拾い集めたり、畑をちょっとばかりつくったりし、やがて体が動かなくなり衰弱して死を待った場所で、最後にここに捨てられた人はヨシエというばあさんであった。私もその頃生まれていたら今頃はここにいたベス」と話してくれた場所だ。

青笹のデンデラ野も集落からすこしばかり離れた原野だ。中古、ここに六角山善応寺という寺があつた。十王堂だけが残り、その別当を佐々木喜平どんの家でやっていた。…(中略)小友村長野のデンデラ野は山裾の台地の原野にあつた。この向かいに寺地山があり、山頂に寺があつた。死人が出るとこのデンデラ野に安置し、白いのぼりをあげると、山頂の寺から和尚が回向をしたという。ここも飢饉の時は老人を捨てたという。

このほかのデンデラ野も集落からすこしはずれた、どの野も家を見渡せるほどの低い台地の原野だ。集落とこの野との境界はほんの小さな流れで区切られ、距離は歩いて5分から10分程度の場所だ。姥捨て伝説というと人里離れた山の奥と想像しがちだが、遠野の姥捨て場は家で一声よぶとたちまち声のとどくほどの近くにある。

この記述を読んで、私がまず驚いたのは、姥捨て場が村のすぐ近くにあつたということである。次に捨てられた老人たちがそこで小集団を形成し、生き延びていたということである。この記述から察する限り、捨てられた老人たちは、「観念し従容として死につき、極楽浄土を夢見て、即身成仏を目指したのではなく、しばらくの間、そこで小集団を形成し生き延びた」のである。私はこのような老人たちの心境をさらに深く知ろうと思い、ネット上で資料を検索してみた。すると偶然、「デンデラ」という本が引っ掛かってきた。さっそく買い求め読んでみると、そこには「姥捨て山の続編」という宣伝文句で始まる棄てられた婆たちの小集団物語が描かれており、「姥捨て伝説」とはまったく異質のものであつた。また本の帯には、その小説が映画化され、6月25日上映開始になると書いてあつた。私はさっそくそれを観に行ってみた。

《 新潮文庫「デンデラ」(佐藤友哉著)のカバーの言葉 》 6月25日全国ロードショー **姥捨て山には続きがあつた。**

斉藤カユは見知らぬ場所で目醒めた。姥捨ての風習に従い、雪深い「お山」から極楽浄土へ旅立つつもりだつたのだが。そこはデンデラ。「村」に棄てられた50人以上の女により、30年の歳月をかけて秘かに作り上げられた共同体だつた。やがて老婆たちは、猛り狂った巨大な雌熊との対決を迫られる。生と死が絡み合い、螺旋を描く。あなたが未だ見たことのないアナザーワールド。

この映画には、草笛光子、浅丘ルリ子、倍賞美津子、山本陽子などの往年の美人女優が、薄汚い老婆の格好で出演していた。しかもこの映画には、棄てられた老婆たちが山奥で生き残り、自分たちを棄てた村と**男社会**へ復讐するため、小集団を作り生き抜いていくが、罨(ひぐま)に襲われたり、雪崩にあつたりして、その目的を果たせず葛藤を続ける姿が描かれていた。この映画の中に爺は出て来ない。同じように山に棄てられた老人でも、爺は集団の対象とはならず、婆たちに助けられることはなく見捨てられていた。この点については、私は男なのでなんとなくしっくりこなかった。それでも上記の菊池氏の記述にもあるように、棄てられた老婆たちが小集団を作って生き延びたというこの映画の設定は、可能性のある話だと思つた。

しかしながら、その老婆たちが村や男社会に対する恨みで、復讐を企てるという設定は頷けない。老婆たちは自ら望んで、しかも喜んで姥捨て場所に入ったと考えられるからである。この本の著者の佐藤友哉氏は31歳の若者であり、老人の心境を理解せよという方が無理であり、彼の姥捨て思想の本質への無理解を非難することはできない。老人たちは、喜んで棄老を受け入れ、村落共同体の繁栄のために「従容として死に就く」ことを、つまり即身成仏し極楽浄土に行くことを自願したのである。私は、これが日本人の死生観の根本にあると考える。少なくとも復讐ということは考えられない。

なおこの映画の中で、老婆たちが団結して果敢に罨に立ち向かう**美しくも勇ましい様子**は、さながら福島原発に立ち

向かう原発シニア隊に似ている。5月中旬、元技術者で原子力関連施設の知識もある東京在住の山田恭暉さん(72歳)が、福島第1原発の事故対応の長期化が予想される中、「僕たちリタイア組がやるしかない」と収束作業にあたる行動隊の結成を呼びかけた。山田さんが「次の時代に負の遺産を残さないため」として、原則60歳以上で現場作業に耐えられる体力、経験を条件に志願者を募ったところ、6月27日現在で、志願者399人、賛同・応援者1250人となり、450万円近い寄付が集まったという。山田さんは「最大限に安全に帰ってくるということがわれわれの課題である」と語っているが、この老人たちが決死の覚悟であることは明らかであり、私にはその姿は神々しく、美しく、勇ましく見える。この原発シニア隊に対して、海外メディアでは「神風特攻隊の再来か」と揶揄するような報道があったようだが、外国人には日本人の即身成仏思想は理解不能であろう。

私も老人決死隊の組織化を提唱していた手前、この山田氏の「福島原発暴発阻止プロジェクト」に賛同し、ただちに馳せ参じなければならぬところなのだが、まだもう少し人生に未練があるし、やり残していることもあるので、精神的支援のみでお許し願いたい。卑怯者、臆病者と言われると思うが、72歳まで生かして欲しい。

2.「霸王別姫」

一般に中国では、今わの際に、辞世の句や遺偈の書を遺す習慣はないようである。この点については異論もあろうかと思う。もし中国の歴史上の人物などで、辞世の句などを遺している例があれば、教えていただきたい。

さて、辞世の句と言えるかどうかかわからないが、私は項羽の最期の際の漢詩が好きである。漢の高祖の劉邦と天下の覇を競った楚の項羽の最期の夜の場面を、司馬遼太郎氏はその著書「項羽と劉邦(下巻)」で下記のように書いている。

項羽は「酔うな」といったことも忘れ、さかずきの中を何度も干し、ついにはその巨眼を赤くし、それでもなお突き上げてくる感情に絶えていたが、やがて巨体をわずかに前へ屈め、小さく声を洩らした。声には抑揚がついている。楚歌の音律であった。激しくかつ哀しい。

力は山を抜き
気は世を蓋(おお)う
時に利あらずして

と歌ったあと、拍っているひざの手をとめ、不意に床をみつめた。やがて

騅(すい)逝(ゆ)かず ※騅とは項羽の愛馬の名称

と、歌った。脳裏に敵の重囲が浮かび、手も足も出なくなっている自分の姿が、雷光に射照られるように映じたのにちがいない。項羽の目にふたたび涙が噴き出し、そのままふりかえって背後の虞姫をひきよせ、

騅逝かざるを奈何(いか)にすべき
虞や虞や若(なんじ)を奈何んせん

と、うたいおさめた。

力拔山兮氣蓋世
時不利兮騅不逝
騅不逝兮可奈何
虞兮虞兮奈若奈

兮(けい)という間投詞が、ことばが切れるごとに入っている。兮は詩の気分には軽みをつける間投詞ではなく、むしろ作り手の項羽が、兮!と発声するごとに激情が一気に堰き止められ、次いでつぎの句の感情に向かっていっそうに発揚する効果を持っている。項羽のこの場合の兮は、項羽のこのときの感情のはげしさをあらわしているだけではなく、最後に虞姫に対し、その名を呼ぶことにいちいち兮を投入したのは、この詩が要するに、

虞姫よ、この項羽の悲運などどうでもよい、この世にお前をのこすことだけが恨みだ

というただそれだけのこのことをこの詩によって言いたかったにちがいない。

司馬氏によれば、項羽は最期に、なによりも「虞姫をこの世にのこす」ことを案じ、この漢詩をうたったという。しかし私には項羽ほどの武将の最期の言葉が、女性への憐憫の情であったとは信じ難い。女性蔑視だと叱られそうだが、たとえその女性が最愛の人であったとしても、今わの際の言葉にしては女々しいような気がする。日本の著名な武将の辞世の句には同様のものはないと思う。やはり日本の武将には、織田信長の「人間50年…」を始め、上杉謙信の「49年 一睡の夢…」などの無常観に裏打ちされた死生観が似合う。なお私は個人的には、辞世の句ではないが、山中鹿之助の「憂きことの なおこの上に積もれかし 限りある身の 力ためさん」(熊沢蕃山作ともいわれている)が好きである。

この項羽の「霸王別姫」のシーンは、京劇として演じ続けられており、中国人の心の中に脈々と生き続けているという。中国人は、武将が最期に最愛の女性の行く末を案じるというシーン、つまりその人間らしい生臭さを好むということなのだろう。ここに中国人の死生観が、色濃く表れているのではないだろうか。

この中国人の心情つまり死生観をより深く理解するために、私はどうしても、この項羽の漢詩を生(なま)の楚語で聴いてみ

たいと思った。もちろん京劇の「霸王別姫」を劇場で見ればよいのだが、その機会がなかったので、私はネット上でDVDを探してみた。すると「さらばわが愛 霸王別姫」というDVDが検索できたので、さっそく買って見てみた。当然私は、その中で、この漢詩が朗々とうたわれると期待して、画面を見続けた。

《 角川エンタテインメント発売のDVD「さらば、わが愛 霸王別姫」のカバーの宣伝文句 》

少年時代から京劇養成所で激しい訓練を受けながら、兄弟同然に成長した二人の役者、段小樓と程蝶衣。たくましい大男の小樓は立役者、華麗な美少年の蝶衣は女形として、京劇「霸王別姫」で人気を得る。蝶衣は幼い頃から小樓に思いを寄せるが、小樓は娼婦の菊仙と結婚してしまう。愛情渦巻く三角関係。日本統治時代、第2次世界大戦、共産党政権樹立、文化大革命、中国の動乱の時代を背景に、愛に、舞台に生きる人々の悲恋を、壮大なスケールと繊細な美学で描く一大叙事詩。

結論から言えば、この映画には、項羽の漢詩の朗読場面はいっさい出て来なかった。しかし私は、この映画から現代に生きる中国人の**生臭さやおぞましさを**学ぶことができた。この映画は、今から20年ほど前に香港で制作されたものであり、二人の京劇役者、項羽役の段小樓と虞姫役の程蝶衣の悲恋の物語である。段は項羽さながらの偉丈夫であり、程は虞姫を彷彿とさせるような、真の女性よりも美しく悩ましい女形であった。程は男性でありながら役に没入するあまり、段を愛してしまい、菊仙と結婚する段をどうしても許すことができない。そこから愛憎渦巻く三角関係が始まる。この映画は、プラトニックな愛が現実の人間行動を支配し、それぞれの人生を複雑に揺り動かしていくという**生臭い**物語である。

しかも彼らが生きたのは、清朝末から改革開放までの中国の超激動期であり、彼らの人生もその歴史に翻弄される。ことに彼らが文化大革命に遭遇し、彼らが命を救ってやった捨て子が、恩人の彼らを裏切るという場面を観て、私は怒りを覚えると同時に、やるせない感情におそわれた。私も文化大革命の渦中を生き抜いてきた人間として、あのとき生起していた**おぞましい人間群像**を思い起こしてしまったからである。現代の中国人は、あの狂気の文化大革命の時代の愚劣かつ残忍な出来事に蓋をし、忘れ去ってしまったかのように、現世利益の追及に血道をあげている。ここに中国人の死生観の一端を垣間見ることができる。

以上